

洛中洛外図屏風の成立過程をめぐって

—「相国寺塔上からの絵」と「朝倉本」についての再考—

小島 道裕

総合研究大学院大学 文化科学研究科 元教授

要 旨

「洛中洛外図屏風」は、京都の全景と共に、名所や祭礼行事、人々の生活を描く絵画であり、16世紀から18世紀にかけて多くの作品が制作された。筆者はその初期の諸作品について成立事情を研究しており、本誌第5号（2009年）に発表した研究ノートでは、記録のみ残る、戦国大名朝倉氏が土佐光信に描かせた仮称「朝倉本」（1506年）について考察したが、関係する作品の研究が進んで、その位置づけを再考する必要性が生じた。また、この問題と関連する、洛中洛外図屏風が相国寺七重塔からの眺望図が元になっている、という説について批判論文が出されたため、それについての反批判を行いたい。

相国寺七重塔は1470年に焼失しているため、「洛中洛外図屏風」に塔からの眺望が利用されたなら、それは「塔上からの絵」を介在させてのことになる。その利用という問題については、現存最古でオリジナルに近いと考えられていた「歴博甲本」（1525年頃）によって検討が行われてきたが、実は制作年代が下がる「上杉本」（1565年頃）の方が想定される「塔上からの絵」に近い。これは、「上杉本」が本来の幕府という意味で「花の御所」を描いているため、幕府が移動したことによって改変された「歴博甲本」よりも「塔上からの絵」に近いためである。同じ観点から考察すると、記録のみが残る「朝倉本」は「上杉本」に近いものだったと推定され、その直接の前提となったと見なせる。

「塔上からの絵」はおそらく景観を描いた絵に過ぎないが、洛中洛外図屏風の要素である、四季の祭礼行事や、町の様子という要素が加えられていったと考えられ、この過程についても、「朝倉本」がどのような段階にあったかという観点から考察することができる。洛中洛外図屏風が「塔上からの絵」から作られたことは、それ自体の問題よりも、このような洛中洛外図同士の系譜関係と、その成立過程を説明できることに意義がある。

キーワード：洛中洛外図屏風、歴博甲本、上杉本、花の御所、相国寺七重塔

The Process of Formation of the *Rakuchū-rakugai-zu byōbu* (folding screens of Kyoto):

Reconsideration of the Picture from the Shōkokuji Temple Tower and the Asakura Version

KOJIMA Michihiro

Former Professor, School of Cultural and Social Studies,
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

Summary

The *Rakuchū-rakugai-zu byōbu* (folding screens of Kyoto) is a series of paintings depicting famous places, festivals and events, and people's daily lives along with panoramic views of Kyoto. In a research note published in Issue 5 of this journal (2009), the author discussed the Asakura version (1506), which exists only in records. The Asakura version was painted by TOSA Mitsunobu under an order from the Asakura clan, feudal lords of the Warring States period. However, research on related works has progressed, necessitating a reconsideration of its position. In addition, a critical paper has been published putting forth the theory that the *Rakuchū-rakugai-zu byōbu* are based on a view from the Shōkokuji temple tower, which is related to this issue. The author would like to offer a counter-criticism.

Since the Shōkokuji temple tower was destroyed by fire in 1470, if the view from the tower was used in the *Rakuchū-rakugai-zu byōbu*, it was through the intervention of a "picture from the tower". The oldest surviving version of *Rakuchū-rakugai-zu byōbu* is the Rekihaku A version (ca. 1525), which is considered to be closer to the original and has been used to investigate this issue. However, the Uesugi version (ca. 1565), which was produced at a later date, is more similar to the assumed "picture from the tower". This means that the Uesugi version depicts the Hana no Gosho (Palace of Flowers) as it was at the time of the original shogunate, and is therefore more similar to the "picture from the tower" than the Rekihaku A version, which had undergone later modifications due to the relocation of the shogunate. From the same perspective, the Asakura version, of which only records remain, is considered to be similar to the Uesugi version and can be seen as a direct predecessor of the Uesugi version.

It is considered that the elements of the *Rakuchū-rakugai-zu byōbu*, such as seasonal festivals and scenes of towns, were added over time to the "picture from the tower", which is just a landscape. The Asakura version can also be examined from the perspective of the stage of this process. The significance of the fact that the *Rakuchū-rakugai-zu byōbu* was created from the "picture from the tower" lies in that it explains the genealogical relationship between the copies of *Rakuchū-rakugai-zu byōbu* and the process of their formation, rather than as a problem in itself.

Keywords: *Rakuchū-rakugai-zu byōbu*, Rekihaku A version, Uesugi version, Hana no Gosho, Shōkokuji temple tower

はじめに

- 1 相国寺七重塔と塔上からの眺望図
- 2 「上杉本」と「歴博甲本」の関係
- 3 「朝倉本」の実態をめぐって（左隻）

- 4 「朝倉本」の実態をめぐって（右隻）

- 5 「月次祭礼図屏風」との関係
- 6 市街を描く絵画としての洛中洛外図屏風
おわりに

はじめに

16世紀から18世紀にかけて多くの作品が制作された洛中洛外図屏風について、筆者は特に初期の作品群を対象に諸本の成立事情についての研究を行っており、本誌第5号（2009年）に発表した研究ノートでは、模本のみが残る「東博模本」と、記録にのみ残る、戦国大名朝倉貞景が土佐光信に発注した仮称「朝倉本」（永正3年（1506））について考察した¹⁾。この内「朝倉本」については、その後関連作品の研究が進展し、位置づけをし直す必要が生じている。また、それと密接に関連する、洛中洛外図屏風はかつて存在した相国寺七重塔からの景観が元になっているという筆者も賛同する説について、このたび否定する論文が発表されたため²⁾、反批判を行う意味からも、改めてこの問題について論じることとしたい。

1 相国寺七重塔と塔上からの眺望図

足利義満が造営したことで知られる「花の御所」については、一つ不思議なことがある。それを描いた絵はいくつかあるのだが³⁾、表側、すなわち正門が開いている室町通の方から見た絵は一つもなく、すべて裏側（方角としては東側）からの絵になっている。だから、教科書や一般書の幕府の挿絵には「花の御所」はあまり使われず、室町幕府を正面から描いた唯一の絵である「洛中洛外図屏風歴博甲本」（国立歴史民俗博物館蔵。1525年頃。以下「歴博甲本」）が使われることが多い。しかしこれは「花の御所」ではなく、第12代将軍足利義晴のために作られた、別の場所にあった御所（「柳の御所」）である。

「花の御所」の絵が裏側からなのは、それが粉本として定着し、絵師の間で使い回されていたからと推測される。ではなぜそんな絵が「花の御所」の代表的な景観と見なされたかと言えば、実際にそういう景色があり、それが知られていたからと考えられる。その景色とは、「花の御所」の東に位置し、高さ36丈（約109メートル）の高さがあったとされる、相国寺七重塔からの眺望である。

そのような「相国寺七重塔からの眺望図」が実在し、それが洛中洛外図屏風の成立に影響したかは長く議論になっている問題だが、筆者は今回、それがまさに洛中洛外図屏風の出発点であり、その絵があったから洛中洛外図屏風が作られたのだと確信するに至った。以下、順を追ってそのことを説明してみたい。

まずこの塔は、応永6年（1399）に落成、4年後の応永10年（1403）に雷火で炎上し、北山に移されるが、応永23年（1416）に炎上、再び相国寺に建てられ、最終的には文明2年（1470）に焼失した。以後は再建されなかったもので、眺望図が描かれたとすれば、それ以前である。

一方、洛中洛外図屏風の初見とされるのは、『実隆公記』永正3年（1506）12月22日条の記事、「越前朝倉（貞景）屏風を新調す、一双に京中を画く、土佐刑部大輔（光信）新図、尤も珍重の物なり、一見興あり」というもので、筆者はこれを「朝倉本」と仮称しているが、この時は既に相国寺七重塔は存在せず、塔上からの眺望を直接参考にすることはできないため、その眺望を利用したならば、「塔上からの絵」によってということになる。塔があった場所は、焼失後も基壇が残っ

ていたことを示す「上塔之段町」「下塔之段町」という地名があり、相国寺の伽藍本体よりもやや東である。地図(図1)に★で示した位置であり、そこは初期洛中洛外図屏風の右隻と左隻の、ちょうど境になる。

この塔上からの眺望が洛中洛外図屏風の元となっている、という説を出したのは、石田尚豊氏(1922～2016)である⁴⁾。石田氏は、洛中洛外図屏風「歴博甲本」(当時は「町田家本」)の観察から、左隻については、近景・中景・遠景の描かれた事物が地図上の並びと一致することに気付き、その線の交点に相国寺七重塔が位置することを発見した。そして、右隻と異なり、左隻が「鳥瞰構成」を取っているのはこのためであるとしたのである。

この説は、洛中洛外図屏風の成立についての一つの考え方として認識はされているが、しかし積極的に支持されているとも言い難い。石田

氏も、「絵画史専門で育った人には「絵そらごと」という観念が根深く教え込まれている」と述べているが、实景を元にしたというこの説への美術史畑からの反応は概して冷淡である。石田説に対して積極的な反論を行ったのは村重寧氏で、地図上の位置関係が合致しない例を挙げて、しいて特定の位置からの実写に結びつける必然性はない、とした⁵⁾。これに対して石田氏は、遠景のいくつかは意図的に移動されているため、それを例に合致しないとするのは意味をなさない、と反論している。今回「塔上からの絵」説への批判論文を発表した藤原重雄氏は、これを踏まえた上で、一条室町(札辻)が市街地部分の左右隻への振り分けの基点であるという自説⁶⁾によって、「塔上からの絵」は考慮する必要がない、と主張する。石田説は「仮説としては斥けられるべき」と断定するのだが、その根拠は、筆者が理解した限りでは「他の説明ができるから」

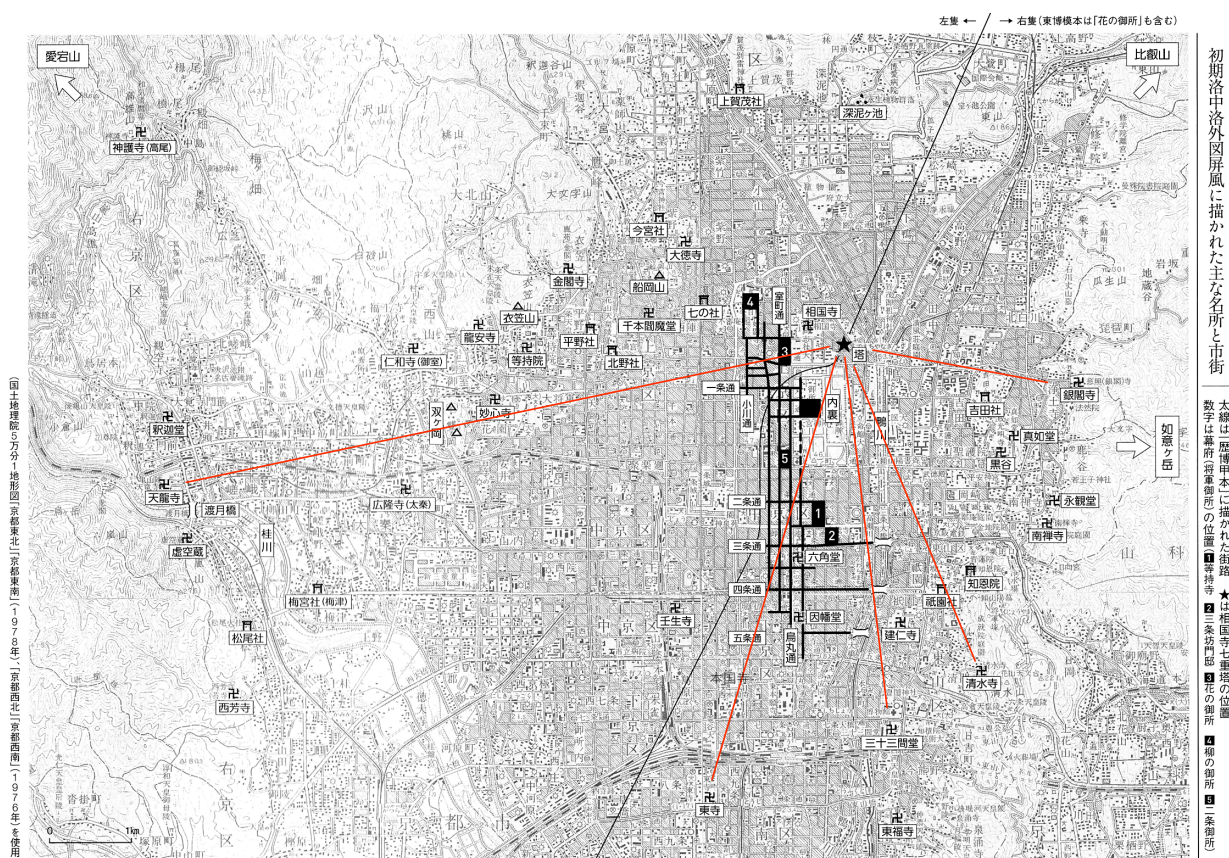


図1 洛中洛外図屏風「歴博甲本」「上杉本」関係地図((注7)『京を描く』所収図に加筆)

ということではない。後述するように、藤原氏の説は、当たっているとしても「塔上からの絵」の利用と相反するものではなく、否定する理由にはなり得ないと考える。

2 「上杉本」と「歴博甲本」の関係

以上の論争については、私は石田説を支持するものの、地図上の位置関係と合致しないものがかなりあり、想定される塔上からの眺望図とは相当のずれが認められることはたしかである。しかしこれは、石田氏が用いたのが「歴博甲本」であったことに起因する点が多く、「上杉本」で検証すると、ずっとよく合致することに気付いた⁷⁾。現存最古で1525年頃に制作された「歴博甲本」に対し、「上杉本」は1565年頃であり、年代的には後になるのだが、実は、こちらの方が元の「塔上からの絵」に近いと考えるとよく説明がつくのである。

なぜそうなるのかについては既に述べているが、「歴博甲本」は、発注者と思われる細川高国が第12代将軍足利義晴のために造営した新しい将軍御所「柳の御所」を描く必要があったのに対し、「上杉本」は、第13代将軍足利義輝の、幕府の本来のあり方として「花の御所」を描く、という要求を反映したものと考えられる。このため、絵の構図を定める際には、「上杉本」は、「花の御所」のあった時代の「塔上からの絵」をそのまま用いることができたのに対し、「歴博甲本」はそれを大きく改変する必要が生じた。そのために、共通する祖本（相国寺塔上からの眺望図）を用いながら、制作年代が下がる「上杉本」の方が祖本に近い、という逆転現象が起きるのである。（御所の位置関係については図1を参照。「花の御所」は「3」、「柳の御所」は「4」である。）

またこのことは、村重氏が石田説の具体的な問題として挙げた、妙心寺と双ヶ丘の位置関係についての説明にもなる。相国寺の塔から見た場合、図1に示したように、この両者は一直線上にほぼ並び、妙心寺は山の右下に重なって見え

るはずだが、「歴博甲本」では右にずれている（図2）。それが「上杉本」では「是正」されている、というのだが、果たしてわざわざ塔から見た場合の正しい位置関係に修正する必要があるだろうか。元は眺望どおりに重なって描かれていたものを、一つ一つの名所として明瞭に描くためにずらしたと考えた方が合理的であろう。ちなみに、「上杉本」ではその先の天龍寺の位置まで地図と画面が一致するが、「歴博甲本」では天龍寺は大きく右に外れる。「上杉本」の方が「歴博甲本」よりも新しいからこの間に修正が施された、というのは思い込みに過ぎず、「上杉本」の方が祖本すなわち塔上からの眺望に忠実で、「歴博甲本」はそれが崩れたもの、と考えれば説明が付く問題である。

同様のことは、他のいくつかの事物についても指摘されているが、やはり「上杉本」の方が元の形を残していると考えるのが合理的である。藤原重雄氏は、「上杉本」でもずれは見られるとしているが、「上杉本」とて、と言うより、そもそも「塔上からの眺望図」自体が実際に見えるものをそのまま描かねばならなかった訳ではないから、重なるものをずらして描いたり、画面に収めやすくするために移動するといった操作を行っていても、何もおかしくはない。藤原氏は、筆者が「上杉本」左隻で、地図上と一致するものについて相国寺の塔の位置から引いた放射線を、恣意的であり石田氏の方法と異なる、と批判するのだが、石田氏が明らかにした結論を受けて、それを逆の方向から検証しようとするのは当然のことである。重要なのは、描かれた事物の多くが放射状に配置されているという事実であり、基本的にその構成が認められるなら、やはり塔上からの眺望図が参照されたと考えるのが理にかなっている。それをわざわざ否定して、別の可能性を考える必要があるとは筆者には思えない。

もう一つ、「上杉本」左隻に描かれた範囲は「歴博甲本」左隻よりもかなり広い、という事実を



図2 双ヶ丘と妙心寺 上:「上杉本」(米沢市上杉博物館蔵)、下:「歴博甲本」(国立歴史民俗博物館蔵)

どう考えるかという問題があるが、これも「上杉本」の方が元の絵に近く、「歴博甲本」はそれを削って作ったもの、と考えれば理解しやすい。

実際に「上杉本」の左右と下を狭めてみると「歴博甲本」とよく一致し、筆者はそれによってこの仮説を裏付けることができる考えた(図3)。「歴博甲本」に見られる船岡山や相国寺の移動も、周囲(左右と下)をカットした結果、これらが「欄外」になってしまい、かつ描く必要があったためと説明できる。この問題で筆者が重要な証拠と考えているのは、藤原氏は無視しているが、「歴博甲本」左隻の下端に描かれた藪で、「上杉本」と比較すると、そこには將軍邸を「柳の御所」にするために抹消した「花の御所」の屋根があったことが分かる。「歴博甲本」当時の実態としては、ここは繁華な室町通であり町家があったと思われるのだが、新たな絵は作らずに意味のない藪を描いてごまかしたのであろう。「歴博甲本」

は、左隻の左側下部が未完成と思えるほど雑で、それもこのためと考えれば説明がつく。「上杉本」とほぼ同じ祖本を加工して「歴博甲本」が作られた、という関係でなければ、このような事態は考え難い。「歴博甲本」を拡大して「上杉本」を作ったと考えるのは無理が大きく、「上杉本」の左隻第一扇はすべて洛外であるという藤原氏の指摘も、実際の景色がそうだからと考えて問題はなく、「歴博甲本」を拡大したという根拠にはならない。

「塔上からの絵」が実際に元になっているのか、それとも藤原氏が主張するように、その「眺望の記憶」が作用しただけの間接的な関係なのか、という違いは水掛け論になりそうに見えるが、これだけの状況証拠が揃えば、「塔上からの絵」が共通の祖本であったと考えるのに十分足りるのではないだろうか。

以上、石田氏の提唱した「歴博甲本」の左隻

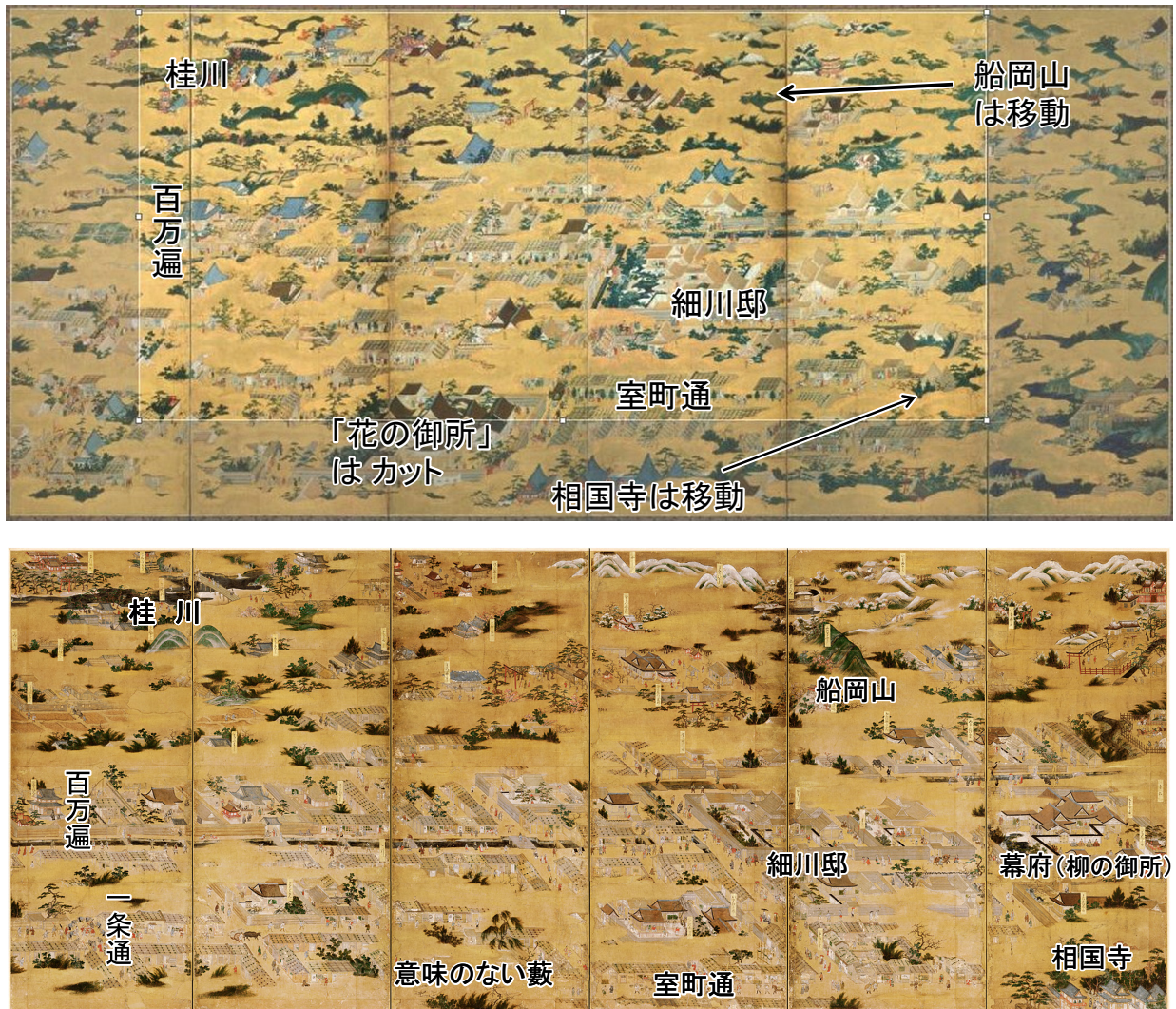


図3 上は「上杉本」の左隻。下は「歴博甲本」の左隻。「上杉本」(とほぼ同じ祖本)をカットすれば「歴博甲本」を作れる。

が相国寺塔上からの眺望に基づくという説については、それ自体は肯定できるが、「歴博甲本」は元の眺望図からかなり改変されており、制作年代が下がる「上杉本」の方が祖本に近いことを述べた。石田氏は「歴博甲本」でこの説を考えつき、しかし「上杉本」は、近景・中景・遠景の「深度が浅い」として評価しなかったのだが、そう見えるのは、「歴博甲本」が「上杉本」(とほぼ同じである祖本)をカットして作られているためではないか。両者を比較すれば分かるが(図3)、「上杉本」は、「近景」となる部分が「歴博甲本」よりもずっと大きい。これは、「歴博甲

本」が「上杉本」の下部すなわち「花の御所」が描かれた部分をカットしているためで、「上杉本」は近景・中景・遠景をシームレスに描くのに対し、「歴博甲本」はカットされた上下を拡大するから、それぞれの間に一種の間延びを生じる。こうした所から石田氏は「歴博甲本」を「深度」が大きいと見たと思われ、そこから石田氏が鳥瞰構成を発見されたことは、研究史上は僥倖だったが、しかしそれは結果的に生じた見かけ上の現象であって、本来的な意味があるものではない。「深度」という問題は意味をなさないと筆者は考える。なお、後述する問題でもあるが、

画面を横切る町家部分（小川通）の比重が大きいことも「歴博甲本」の特徴で、おそらくこれも近景と中遠景の区別が分かりやすい一因である。

改変が大きい「歴博甲本」のみで塔上からの眺望を論じると「どこまで合致するか」の論に陥りやすいが、「上杉本」で検証すればその問題はほぼ解消する。そして何よりも、「歴博甲本」と「上杉本」の相互関係を説明できることに「塔上からの絵」を想定する最大のメリットがある。藤原氏の批判は、結局「塔上からの眺望」説を認めるかどうかという点にこだわっているにすぎず、問題を矮小化している。筆者がこの問題を取り上げるのも、「どこから見たか」という問題を明らかにするためではなく、洛中洛外図屏風同士の相互関係、すなわち系譜的なその成立過程を明らかにするためなのだが、その点を見落としておられるのは残念である。

3 「朝倉本」の実態をめぐって（左隻）

では、「朝倉本」はどのような絵だったのだろうか。結論から言えば、まず左隻の構成は「上杉本」とほぼ同じものだったと思われる。問題になるのは幕府をどう描いたかで、「朝倉本」が描かれた永正3年（1506）の時点では、実際には独立した將軍邸はなく、將軍足利義澄は細川氏の邸宅群の一部に居住していたのだが、土佐光信が朝倉氏から求められたのは、おそらくそのような現実そのものの姿ではなく、本来の「花の御所」が描かれた京都だっただろう。「花の御所」は、応仁文明の乱最中の文明8年（1476）に全焼するが、再建の試みはなされており、「朝倉本」の頃は、まだ意識としてもそこにあるべきものと思われていたのではないだろうか。もちろん、「歴博甲本」に描かれている「柳の御所」がある訳でもないで、「花の御所」以外の將軍邸が描かれる可能性は考えにくい。

だとすれば、その左隻は「上杉本」とほぼ同じものになるはずである。前稿では、「歴博甲本」

と「上杉本」の関係に気付いていなかったため、この点を明確に言い切れなかったのだが、「上杉本」が「花の御所」を描く祖本（塔上からの絵）を直接継承しており、「歴博甲本」は「柳の御所」を描くために祖本を改変した、という関係が分かれば、「花の御所」を描いていたであろう「朝倉本」左隻もまた祖本である「塔上からの絵」を直接継承しており、従って「上杉本」と同じ構成である、と述べることに躊躇する必要はなくなる。

前稿では、勝手の方角を、月次の事物を扇ごとに入れることにこだわったため、右隻の祇園会を六月の扇（第1扇）に入れやすい右下がり（「歴博甲本」と同じ）と考えたのだが、それはこだわる必要のないことであり、「上杉本」と同じ左下がりと考えた方が良い。「歴博甲本」が右下がりになっているのは、中心主題である「柳の御所」を描きやすい、というのが一番の理由と考えられるので、その必要がなければ、勝手を変更する必要性も低いはずである。後述するが、右隻も内容的に左下がりと考えた方が合理的である。

「朝倉本」の左隻は「上杉本」とほぼ同じものと考えられ、すなわち相国寺塔上から描かれた絵に基づくものであるとすれば、要するに、洛中洛外図屏風という絵画の左隻はすべてこの眺望図が起源であり、この絵があったからこそ「一双に京中を画く」洛中洛外図屏風という絵画が成立したのだ、と言って過言ではない。単に京都の全体を描く絵を作りたいのであれば、例えば江戸時代後期に実際の作例があるように⁸⁾、西山の上空から京都を見下ろした形で描けば、内裏も、幕府も、東山や、北山、嵯峨などの名所群もすべて描くことができる。もちろん他の方角から描いても良く、東寺五重塔からの視点と言われる「舟木本」などのように、南側から描くのも一つのあり方である。しかるに、「歴博甲本」「上杉本」などの初期の洛中洛外図屏風は、^{かみぎょう}上京の上空から西側と東側に分けて描く、という非常に特異な視点で描かれている。しかもそ

の視点の位置は、左隻では相国寺の東に特定される。そこから見た光景が実際にあったのであれば、その発想は出てこないだろう。その位置から見ずして鳥瞰図を描くことは可能だろうが、そこには実際に巨大な塔があったのである。塔上からの光景が元になっていることを否定する方が難しいのではないだろうか。

そして、これは石田尚豊氏が強調していることだが、この相国寺塔上からの眺望とは、この塔を作った足利義満の視点である。「上杉本」の左隻を見れば分かるように、手前に大きく描かれるのは「花の御所」と相国寺の伽藍であり、それが発注者が最も見たかったもの、見せたかったものと考えるべきであろう。そしてその周囲には、「上杉本」などにも描かれている細川邸の他にも、「上杉本」では「畠山辻子」の遊廓となっている場所に畠山邸があり、また細川邸の西（絵では上）には山名邸もあるから、この付近は武家屋敷が立ち並ぶ景観を呈していた。また、これも石田氏が指摘する所だが、金閣（鹿苑院）が描かれている場所には、義満当時には「花の御所」を上回る規模の北山殿が存在した。その造営は塔に先立つ応永4年（1397）からであり、つまり相国寺の塔上から西側を見れば、義満が自ら再構築した京都が望まれたのである。「歴博甲本」「東博模本」「上杉本」のいずれもが京都を統治する権力者の自己満足ないしは願望であることから考えれば分かるが、京都の全景を描かせるといふ行為は、本来的にはその統治者のものである。自ずと義満政権の栄華を示すことになるこの塔上からの眺望を、義満が絵として残し、悦に入っていたであろうことは十分想像できる。

石田氏は、塔上から南を見ると、わずか方一町の内裏と貧弱な公家邸、東山の古い寺社があり、この二分された京の町の新旧の実感こそが洛中洛外図屏風成立の原点、としている⁹⁾。それは当たっていると思うが、内裏と公家邸のエリアは、絵画化された場合、必ずしも否定的には

描かれなかったのではないか。室町幕府は朝廷と共に存在する公武合体政権であり、内裏もまた義満の下で栄える京都を構成するものとして扱われたのではないだろうか。幕府と内裏を一隻ずつに描き分け、合わせて自らの栄華を誇る、という構想は、塔上からの景観がやはり元になったと考えられる。戦国大名朝倉氏が自らの城下町一乗谷を建設していくに当たって求めたのも、そのような統治者の視点から見た京都の姿だったであろう。

なお石田氏は、洛中洛外図屏風の成立について、中国絵画との関係も指摘している。相国寺は「明文化摂取のセンター」でもあり、「清明上河図」や、相国寺にも在籍した雪舟が応仁2年（1468）に入明していることなど、都市を描く絵画としての洛中洛外図屏風の成立の背景に中国絵画の影響を想定し、その上限も塔の焼失した文明2年（1470）よりも遡って考えるべきだとしている。成立史の上でどこからを「洛中洛外図屏風」と呼ぶかという問題はあがあるが、京都の全体的な景観を鳥瞰図として描く絵画という意味では、その起源は相国寺七重塔の存在した時期に求められる、と筆者もまた考える。

4 「朝倉本」の実態をめぐって（右隻）

洛中洛外図屏風の左隻が義満の描かせた「塔上の絵」に始まることを述べてきたが、では右隻はどのようにして作られたのか、という問題について考えてみたい。

ごく常識的に言って、もし「塔上からの絵」が西側について描かれていたなら、反対側である東側の景観についても描かれていただろう。ただ、それは単純に東側ということではなく、西側の眺望が「花の御所」と相国寺を中心とする「義満の城下町」を優先的に描くものだったなら、その「残り」の部分を描くのではないだろうか。地図（図1）を見ると分かるのだが、京都の東側では、比叡山を除けば、吉田山や銀閣寺より北には特に描くべきものがない。そこよ

りも南、東山から東寺までのエリアを描くと、西側の絵とうまく対称がとれる図になる。そしてそれは吉田山を左上に、東寺を右下に配置した「上杉本」の構図とおおよそ合致し、洛中洛外図屏風は、右隻もまた「塔上からの絵」が起源なのではないか、という仮説を考えうる。

右隻については、東山に向き合う形で視点を移動して描いたと考えるのが通説であり、石田氏もそれを疑っていないため、左隻と右隻で構成原理が違ふことになるのは「塔上からの絵」説の弱点でもあったのだが、しかし、それは結果的にそう見えているだけではないだろうか。問題は、やはり現存最古の洛中洛外図屏風である「歴博甲本」が最もオリジナルに近い、という思い込みである。左隻について既に述べたように、「歴博甲本」は対象となる事物を適宜ずらして、重なりを避けた独立した存在として描く傾向がある。それは右隻でも同じであり、それぞれの名所をそれぞれの絵として配置し、詳しく描いている。あたかも東山を背景に寺社の絵を貼り付けていったかのような構成であり、手前の下京まで含む南北に長い市街地部分と一緒に見ると、視点を南北方向に移動させながら描いているかのように見えるのだが、後述するように、この市街地部分は、おそらく後から加えられた、ないし増強された要素と考えられる。完成形を分析することで成立史を論じるのは必ずしも正しくない。

「上杉本」の東山の描写は、「歴博甲本」の描写とはかなり雰囲気が異なる。東山の名所群は、特に祇園社や清水寺が顕著だが、「歴博甲本」のように大きくは描かず、景色の中の点景としての雰囲気を残しているように思える。逆に吉田山は大きく、存在感がある。これは、相国寺七重塔からの距離の違いである可能性を考えられ、元になった「塔上からの絵」の性格を引きずっていると見ることはできないだろうか。

「上杉本」の吉田山の裏側（絵では上部）には銀閣寺が描かれており、位置的には相国寺の塔

から見た場合の景観と一致する。もっとも、足利義政が東山殿の造営を始めるのは1482年（文明14）で、塔が焼失した後だから、実際の景色としては眺められないのだが、しかし「塔上からの絵」に描き足すならこうなる。銀閣寺についての「上杉本」の書き込みは、その制作当時、1565年頃ならそうであったはずの「慈照寺」ではなく、「ひかしやま殿様」になっている。義政は延徳2年（1490）に死去し、東山殿はその後で慈照寺となるのだが、存命中ならもちろん、「朝倉本」が作られた永正3年（1506）頃でも、まだ「東山殿」の方が通りが良かったかもしれない。「朝倉本」は、地方にいる武士に京都の景観を示すという性格上、「上杉本」同様に、描かれた事物には名称などが書かれていたと思われるが、「上杉本」の吉田山や「東山殿」のあたりの描写は、それを引き継いだ可能性を考えられる。

右隻の範囲も、「歴博甲本」と「上杉本」で大きく異なる。「上杉本」は、右下の部分に、第一扇から二扇にかけて、七条道場、本国寺、東寺などの寺院を描いているが、「歴博甲本」は、勝手を右下がりにしたこともあって、京都の南側は、五条～六条付近の万寿寺、因幡堂、悲田寺までに留まっており、七条以南のこのエリアは描いていない。「朝倉本」の右隻の範囲がどちらであるかを考えるなら、京都の全景を示す必要上、東寺までの範囲を描いていたのではないだろうか。「歴博甲本」は、代わりに市街地部分を大きく取るのだが、この描き方は、後述するように実際の景観に基づく構図を脱した新しいものと考えられ、いずれにしても「朝倉本」との一致は必然性を考えにくい。「朝倉本」は、右隻においても、先行する京都の景観図である「塔上からの絵」を元に作られた可能性が高く、「上杉本」と構図的に一致するものであったと想定することができる。

「上杉本」の右隻が「塔上からの絵」と一致するかどうかは、左隻の場合と同じ様に、「上杉本」の画面の中での描かれた物の位置関係と、相国

寺七重塔から見た場合の地図上での関係を比較することで確認できる。「恣意的である」という批判がまた予想されるが、仮説的な作業ではそれはやむを得ない。「上杉本」右隻に、相国寺七重塔があった地点から線を引いてみたのが図4の下図である。図1の地形図にも同じ位置に線を引いているので、見比べていただきたい。

相国寺七重塔の位置は内裏の北北東になるから、その辺りを基点として、まず東寺に向かって線を引いてみる。すると線が通るのは、内裏の東側と、東寺の手前にある本国寺の東側であり、地図と一致する。線の上側（東側）に位置する洛中の寺院、因幡堂、六角堂、等持寺（図1の「1」の場所）や、線の下側（西側）になる斯波邸（武衛、図1の「5」の場所）、あるいは二条

室町付近にあった二条邸のような邸宅の位置も、ほぼ地図上の関係と一致する。

次に塔から三十三間堂に向かって線を引くと、四條橋やその左に描かれた四條道場が地図と同じ位置に描かれていることが分かる。建仁寺との位置関係も正しい。地図上では線の先になる東福寺は、画面では三十三間堂の上に描かれているが、これは画面に収めるための操作として理解できる。

塔から清水寺に向けて引いた線の上には、地図通りに祇園社が位置する。知恩院の位置関係もおおよそ正しい。南禅寺と永観堂は地図上の位置と一致しないが、これは、この部分が地理的に大きく東にはずれているため、画面上では手前に持ってきたと考えられる。

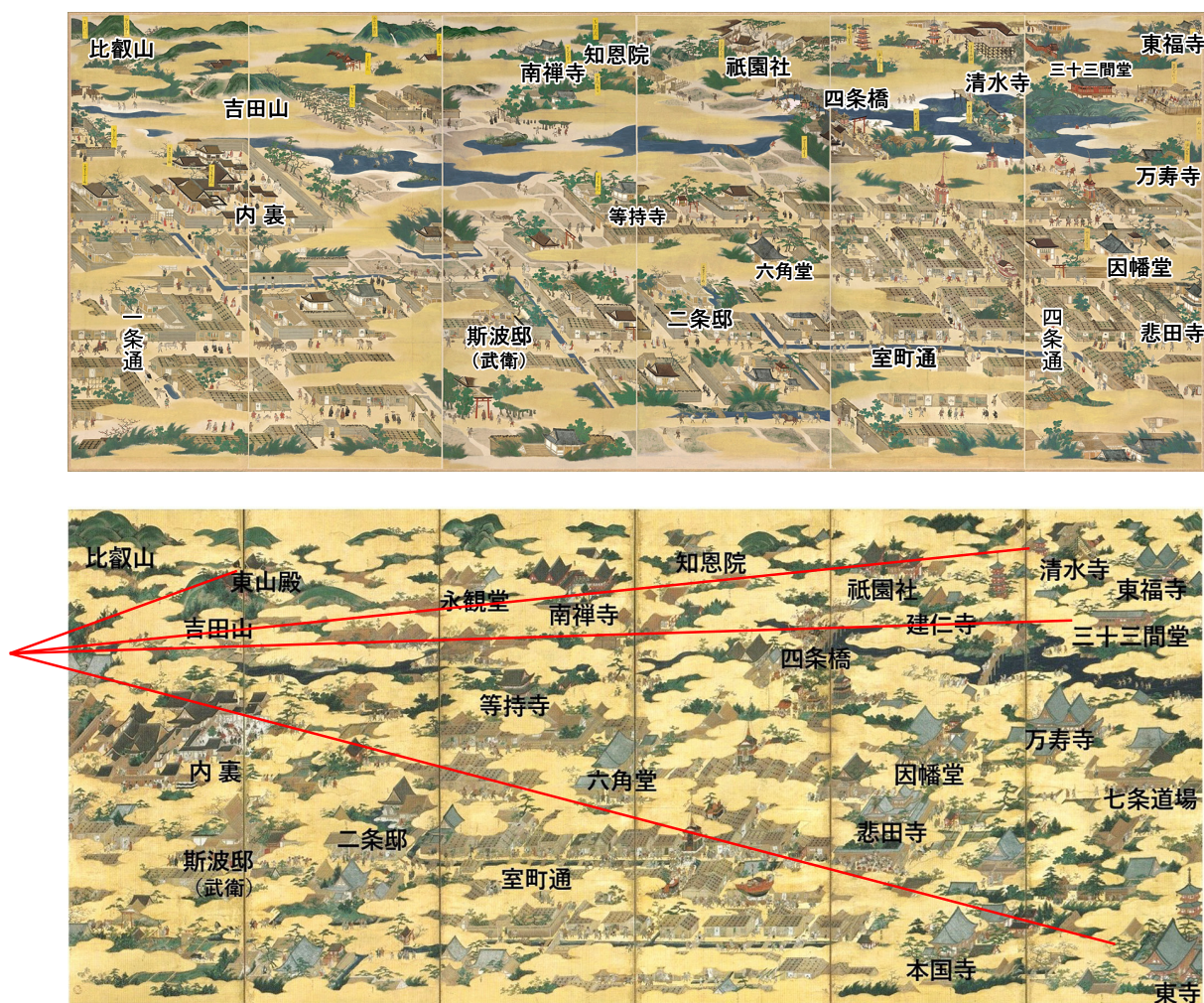


図4 「歴博甲本」の右隻（上）と「上杉本」の右隻の比較。（「歴博甲本」は復元版を使用。）

そして、東山殿（銀閣寺）に向けて引いた線は地図と同じ様に吉田山の北部を通り、先述のように「塔上からの絵」そのものではないが、それに合わせた描写と理解できる。

「上杉本」の右隻は、東山に向かって視点を移動させながら描かれているのではなく、内裏北北東の、画面では欄外になる一点、すなわち相国寺七重塔の視点から描かれた鳥瞰的な構成を取っている、と言える。「歴博甲本」では、例えば清水寺と祇園社の位置関係は、祇園社が上にずれている。「歴博甲本」は、左隻の場合と同じ様に、右隻においても元の絵の一部をカットし、事物の位置を適宜ずらして、つまり崩して作られている、と考えるのが合理的で、「上杉本」を作る際に拡大と修正を施した、と考えるのは無理が大きい。

「上杉本」が参照したのは「歴博甲本」とは別の絵、すなわち「塔上からの絵」、ないしそれを直接引き継いだ絵としての「朝倉本」であると考えられる。その絵は、左上に比叡山、実際の風景としては吉田山を置き、右下に東寺を配置し、その間に東山の名所群と京都の市街を描く、という「上杉本」と同じ構成に既になっていたはずである。

少し見方を変えて、屏風の具体的な制作について考察すると、「上杉本」に直接先行する絵画として「朝倉本」が存在し、その控えなどのデータを参照することができたなら、それは「上杉本」の制作を受注した狩野永徳にとって、きわめて有利な条件だったはずである。少なくとも、既に存在しない「花の御所」を描くには、それが存在したときに作られた粉本が絶対に必要であり、実際、「上杉本」の「花の御所」は足利義政のものとされ¹⁰⁾、すなわちまだ相国寺七重塔の存在した時代に当たる。「花の御所」だけの絵なら、わざわざ裏側から描くことは考えにくく、それはさらに範囲の広い、塔上からの眺望図だったのではないか。そして、それを元にした先行する一雙屏風である「朝倉本」の情報があり、

それを利用する形で「上杉本」を作った、と考えるのが自然な想定ではないだろうか。

もしそうした存在が無く、「歴博甲本」「東博模本」のみを前提に「上杉本」を作るなら、範囲を大きく広げて新しい構図を作り、それまで描かれていなかった多くの事物を入れ込むという、それまでの洛中洛外図屏風を一新する大変な作業になる。それを天才・狩野永徳が行ったと考えるのは過大評価であり、その際、相国寺七重塔のあった場所から見た場合の地図上の位置とも一致するように個々の事物の位置に修正を施した、というのはあまりに考え難いことである。洛中洛外図屏風は、先行する作品を継承しながら、それぞれの必要に合わせて更新を繰り返して作られていったと考えた方が良い。

洛中洛外図屏風の発注者であった武家の権力者は、決して権力の永続性が保証されていた訳ではなく、それぞれの発注の具体的な契機、すなわち「歴博甲本」なら新たな將軍御所の完成に伴う上臈三条氏への贈呈、「上杉本」は上杉謙信へのメッセージ、「朝倉本」はおそらく本格的な建設に向かう一乗谷での正月儀礼での使用、といった、目の前の課題のために一種の予祝として屏風を用いるという目的があり、それに合わせた完成を求めたに違いない。絵師には長期に渡る調査研究の余地はとてもなく、その時に手元にある素材に基づいて急いで注文に応えたはずである。「歴博甲本」に未完成とすら思える雑な部分があることや、「東博模本」に幕府場面の右隻への無理な移動があるのもそのためと考えられよう。これらに対し、「上杉本」は完成度が高く、破綻が見られないが、それは既に存在した「塔上からの絵」の構図をそのまま継承し、「朝倉本」として既にまとめられていた洛中洛外図屏風の内容を踏襲しているからであると理解できる。

「朝倉本」は、作者である土佐光信は足利義政など幕府との関係も近く、「塔上からの絵」を利用して洛中洛外図屏風を作ることができたと思

われるし、また狩野元信の岳父とされることから、その情報が後に続く狩野派の洛中洛外図屏風に受け継がれたと考えても不自然ではない。「歴博甲本」も「上杉本」も、制作にあたっては「塔上からの絵」そのものも参照したかもしれないが、直接的には「朝倉本」を元にしたと考えて良いのではないだろうか。

5 「月次祭礼図屏風」との関係

洛中洛外図屏風の成立に関しては、先行する絵画として「月次祭礼図屏風」の存在も早くから注目されている。この屏風についても近年研究が進んでいるため¹¹⁾、洛中洛外図屏風との関係について改めて考察してみたい。

この絵は、現在右隻相当の六扇分の、彩色などが不完全な模本のみが残され、東京国立博物館に所蔵されている。描かれた月としては、正月（幕府の弓始）から六月（祇園会）に当たり、当然、左隻相当のもう一隻には七月から十二月の祭礼行事が描かれていたと考えられる。祭礼同士の地理的な関係は絵の中では一致しないが、山を背景に手前に都市の様子を描く構図は洛中洛外図屏風を思わせるものがあり、京都の四季

の行事を描く屏風絵として、その一つの前提と考えられてきた。

近年、描かれた事物や年代についての研究が進んでおり、特に右端に描かれた幕府について、そのすぐ上に描かれた神社を三条八幡と見なせることから、足利義持の三条坊門御所（図1の「2」）であり、景観年代は15世紀前半、あえて言えばその上限、義持がこの御所に移転した直後の応永17年（1410）に比定され、制作年代もほぼ一致すると考えられる¹²⁾。幕府の弓始を含む第一扇から第三扇の闘鶏場面にかけて描かれた大きな建物群（祭礼行事としては、松囃子、鶯合、鶏合）は、すべてこの三条坊門御所と見なせる。弓始の場面に描かれた「裏築地」や「脇壁」のような、将軍の身分上昇についての描写も正確で、最盛期を迎えた室町幕府の下で栄える京都のありさまを描いた絵であるが、しかし、発注者はおそらく将軍や幕臣ではなく、この時、幕府と朝廷の両方で権勢を振るっていた日野重光であると考えられる。妹の日野栄子は次の将軍義量の母、従姉妹の日野資子は次の天皇（称光天皇）となる躬仁親王の母という、双方の外戚となることが約束された立場であり、実際、



図5 「月次祭礼図屏風」復元模写 描かれた事物を明瞭に示すために、復元模写を用いた。愛知県立芸術大学制作・所蔵

躬仁親王が即位する際には、三条坊門御所と内裏の中間、両者を結ぶ万里小路に面した日野重光邸を将軍義持が訪れ、親王と牛車に同乗している¹³⁾。このような、幕府と朝廷が共に栄える様を、祭礼行事を中心に描いたのがこの屏風だったと理解できる。

「月次祭礼図屏風」の失われた左隻に何が描かれていたかは、まだ科学研究で検討中だが、周目の一致する所、左隻の左側には内裏が描かれていたと推定される。左隻左端は十二月に相当する扇だが、祭礼行事としてはやや考えにくい。ため、右隻右端の幕府の弓始と対になるような内裏の代表的な正月儀礼、例えば節会のようなものが描かれていたのではないだろうか。だとすると、それは「歴博甲本」や「上杉本」の右隻に近いものになってくる。また、地理的な位置関係としても、「月次祭礼図屏風」の両隻を並べた場合、左端の内裏と右端の幕府は、南北方向で実際の位置関係と一致する。全体的に、大まかな位置関係としては実際に近いものがあり、この点でも洛中洛外図屏風の前提をなす絵画という評価を与えることができる。左を北、上を東として京都の景観に見立てようとする、月ごとの祭礼行事を各扇に割り当てる都合上、南郊で行われる深草祭が東であるはずの第5扇の上部に登場するといった乱れは生じるが、しかし、第1・2扇上部の伏見稻荷は実際の方角と合致し、地理的な要素を全く無視している訳ではない。季節を優先しながら、やはり京都の「全景」を指向する絵だと見なせるだろう。

足利義満の相国寺塔上からの眺望図が、地理的な景観として幕府を中心とした公武合体政権の下で栄える京都を描いたものだとすれば、「月次祭礼図屏風」は、祭礼行事の面で、同じ様に公武の栄華を描いた絵画だったと言えよう。直接の発注者は日野重光と考えられるが、そこには、父義満の「花の御所」を廃し、あえて三条坊門御所に幕府を戻した義持の意図が反映されているはずである。「相国寺塔上からの絵」が義

満の京都の栄華を描いたものなら、「月次祭礼図屏風」は、義持の代の京都を描いた、その記念碑となる絵画だったと言えよう。

「月次祭礼図屏風」の作者としては、近年土佐行広が候補に挙がっている¹⁴⁾。「朝倉本」を作った土佐光信の二世代前に当たる人物であり、足利義満と足利義持の肖像を描いている。また足利義政の肖像は土佐光信が描いたとされており、室町幕府の将軍と近い関係にあった彼らは、「相国寺塔上からの絵」があったなら、それに接する機会があっただろうし、自身がそれを描いた可能性も十分考えうる。いずれにしても、「相国寺塔上からの絵」から洛中洛外図屏風への流れには、「月次祭礼図屏風」も含めて、この絵師の系譜が大きな役割を果たしたと推定できる。

6 市街を描く絵画としての洛中洛外図屏風

「相国寺塔上からの絵」と「月次祭礼図屏風」という二つの絵によって、地理的に京都を描く絵であり、かつ四季の祭礼行事を描く絵であるという、洛中洛外図屏風の二つの要素が揃ったことになるが、しかし、そこにはまだ「町」は含まれていない。洛中洛外図屏風のもう一つの側面である、京都に住む多様な人々、特に町人たちの生業や風俗が盛り込まれるのは、応仁文明の乱を経て京都の市街が上京・下京に凝集し、「両側町」が成立して、町人の新たな活動の姿が目を引きようになったことが背景だろう。公家の山科言継が父親らと連れ立って下京の「店屋」を見物に出かけたのは、「歴博甲本」が描かれたのと同じ頃である（『言継卿記』享祿2年（1529）正月24日条）。公家・武家などの上流の人士が町と町人の姿に関心を持つようになり、それが三つ目の要素として取り入れられて、洛中洛外図屏風の内容が固まったと言える。石田氏も指摘するように、「職人歌合絵巻」もこの頃に作られており、代表的な「七十一番職人歌合」は土佐光信が描いたと伝えられている。

足利義満の段階、ないし文明2年（1470）以前

に描かれた相国寺塔上からの絵は、基本的に風景を描く絵画であり、まだ町や町人の姿はそれほど具体的には描かれていなかっただろう。寺社や武家・公家の屋敷以外の市街の姿は、雪舟の「唐土勝景図巻」や「天橋立図」のように、町家の屋根を連ねた形で、塊のように表現されていたのではないだろうか。

それを、実際の街区に沿った形で一軒一軒を拡大して表示するような描き方になったのは新しい描写方法と言え、特に1525年頃の「歴博甲本」は、町の部分を詳しく描いていることが注目される。第2扇の中部には大きな欠損部分があり、塗りつぶしたような稚拙な修復が行われているため、図4には復元版を掲げた。これによって、口の字型の街区が連続する本来の構成を理解しやすくなる¹⁵⁾。

そして、町ごとに設けられた床屋が街区の角すなわち町の共有として使われる家に描かれていることや、街路に面した三軒ほどで表現される町の内、真ん中の家が二階屋などの富貴なものとして描かれることは、この頃に発達した両側町の仕組みを理解し、その実態を反映したものである。この段階では、町人の町を重要な要素とし、街路と町家を具体的に描く絵画としての洛中洛外図屏風が成立している。「歴博甲本」は、右隻では三扇分をこのような街区の描写に当てており、特にその比率が大きい¹⁶⁾。

これに対し、東寺までの広い範囲を描く「上杉本」は、下京の町は二扇分にとどまり、両側町の描写もなく、「裏」の空間を無視して、町家が横も裏も接した形に描かれている。描き方の新旧で言えば、新しい要素である両側町を具体的に描いた「歴博甲本」の方が新しく、「上杉本」の方が古いと見なせる。「上杉本」の描きの方が「塔上からの絵」に近いと考えるべきであろう。

では、1506年に作られた「朝倉本」はどうか。朝倉氏の発注目的が、京都を模した城下町づくりの参考にするためと考えられることから、町人の町についてもかなり具体的な描

写はあったのではないか。しかし、右隻に描かれた範囲が「上杉本」のように東寺までだったと想定すれば、あまり大きな部分を町の描写に割くことはできないから、両側町を詳細に描く「歴博甲本」のレベルまでは達せず、「上杉本」程度の、より塊状に近い描き方であったと考える方が妥当であろう。この面でも、「上杉本」と「朝倉本」は一致する可能性が高い。

現在見ることができる洛中洛外図屏風には、市街地部分の街路や町の描写が当然のように含まれているが、それは歴史的に見れば後から発達したものであり、町部分の具体的な街路などまでを描くようになった時期は、おそらく応仁文明の乱以降、15世紀末ないし16世紀初頃まで下がるのではないか。藤原氏は、「歴博甲本」において一条室町が右隻・左隻の結節点となっていることを元に「塔上からの眺望図」の利用を否定するのだが、平面としての「碁盤の目」的な街路をどう描くかという問題と、立体的な景観をどう描くかというのは別の問題であるし、洛中洛外図屏風の成立史の問題として考えれば、先にあったのは「塔上からの絵」という自然景観と名所を中心とした絵であったと考えられ、平面的な市街地の描写に基づいて周囲の景観を立体的に描くという逆の順序は考え難い。市街地を丁寧に描く「歴博甲本」によって考えると、右隻・左隻が街路の一つの基点で分けられて作られたように見えるかもしれないが、何度も述べるように、「歴博甲本」がオリジナルに近いというのは思い込み過ぎず、実際にそれに近いと考えられる「上杉本」では、右隻の左下、すなわち左隻と接続する部分の描写はあいまいで、一条室町が結節点とは必ずしも言えない。「塔上からの絵」が先にあり、義満の「城下町」の景観を優先的に描くとその辺りが左隻の端になる、という単純な事実に基づくと考えて問題はない。右隻・左隻を分ける視点の位置が一条室町の上空であるなら話はまた変わってくるが、そうではなく、どう見てももっと東寄りの、事実とし

て相国寺の塔があった付近になる。街路の区分けの問題は、洛中洛外図屏風が塔上からの絵に基づいて作られたことを否定する論拠にはならない。

おわりに

以上、洛中洛外図屏風の成立過程という観点から、相国寺塔上からの眺望図の利用という説の可否とその意味を再度考えてみた。それが存在したことはほぼ確実であり、景観図としては「原・洛中洛外図」としての性格を持つが、しかしそれは季節や祭礼行事を描くものではなく、また市街での生活の描写を要素として持つ風俗画でもなかっただろう。町部分の描写まで含んだその総合的な成立は、室町時代前期の、王朝的な性格を色濃く残す公武合体政権最盛期の京都においてではなく、応仁文明の乱を経てそれが崩れ、京都が町人を一方の主人公とする新たな都市に変貌した後のことであったと考えられる。「朝倉本」は、おそらくその最も早い時期の作例であり、それ以後の洛中洛外図屏風に引き継がれていった存在と評価できる。既に提示していた系譜図は、曖昧にしていた「朝倉本」の位置付けを変えて、図6のように改めた。「朝倉本」は、「歴博甲本」「上杉本」双方にとってそのモデルであるが、直接的には「花の御所」を中心に描く絵画の系譜であり、「花の御所」をカットして細川邸を中心とした「歴博甲本」および「東博模本」が異例なのである。制作年代が現存最古だから「歴博甲本」がオリジナルに近いと考えるのは誤りである。

蛇足ながら洛中洛外図屏風のさらに後の展開に触れるなら、「舟木本」は、市中の風俗を描く絵画という側面が最高潮に達した絵画であり、六条三筋町遊廓がその正面に配置され、政治的な要素としても、東に豊臣の大仏・西に徳川の二条城という、義満以来の公武が並び立つ構図を脱し、武家の間の勢力の拮抗を表したものになっている。その後、洛中洛外図屏風は、左隻

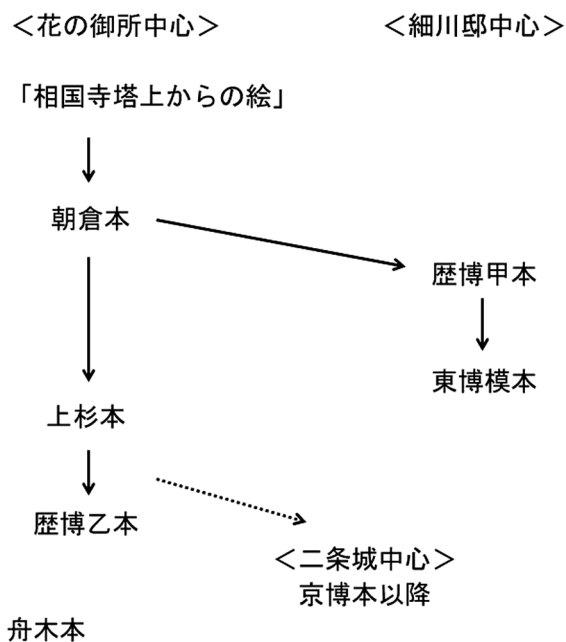


図6 洛中洛外図屏風の系譜（左隻による比較）

には二条城とそこへの行幸、右隻には内裏という、再び公武合体的な政治体制を描く絵画となり、相国寺塔上からの眺望図に発出する両隻の構図が定着した。およそこのように理解できるのではないだろうか。現存の絵画である「歴博甲本」「上杉本」などを単純に時系列で並べただけでは洛中洛外図屏風の成立過程を理解することは難しいが、「塔上からの絵」という現存しない絵画を想定し、「朝倉本」という内容の不明な絵画についても考察すれば、構成と内容に基づいた通史を見出すことができる。

「相国寺塔上からの眺望図」は、それ自体としては残っていないが、しかし失われてしまった訳ではなく、京都を東西に分けて描く洛中洛外図屏風の中に、一種の写本ないし異本として受け継がれていったと見なせる。それらはみなDNAを受け継ぐ子孫であり、それらを透かして見れば、元の「塔上からの絵」を思い描くことが可能である。

以上、仮説的な部分が多い論旨であり、これによってもまだ大方の研究者を納得させることは難しいかもしれない。しかし、総合的な研究

とは、不明な点があっても、あえて全体を考察する作業でもあるのではないだろうか。本誌『総研大文化科学研究』に、再び掲載を願った意図を諒としていただければ幸いである。

注

- 1) 小島道裕「洛中洛外図屏風『東博模本』の成立事情および『朝倉本』に関する考察」(『総研大文化科学研究』第5号、2009年)。
- 2) 藤原重雄「〈相国寺七重塔からの眺望画〉説の再論に対して—洛中洛外図屏風成立史論のうち—」(『東京大学史料編纂所附属 画像史料解析センター通信』第104号、2024年)。
- 3) 洛中洛外図屏風では、「東博模本」、「上杉本」、「歴博乙本」が花の御所を描くが、いずれも裏側からである。「洛中洛外図帖」(奈良県立美術館蔵、16世紀)も同様。
- 4) 石田尚豊氏がこの説を発表した初めての論文は、「洛中洛外図屏風について—その鳥瞰的構成—」(『美術史』30、1958年)。その後の関連論文は、同『空海の帰結—現象学的史学—』(中央公論美術出版、2004年)に収録されている。
- 5) 村重寧「初期洛中洛外図屏風の視点と構成」(『近世風俗図譜③洛中洛外(一)』小学館、1983年)。藤原氏は、「それ(村重氏)以降、論ずるに足らないと判断した美術史研究者が多数であったのか、正面切った論評は稀である」としている。文献史家の村井康彦氏は、石田説について「素朴リアリズム論の域を出ない」と評しており(『洛中洛外図屏風の景観』(『史窓余話』14、『国史大辞典』第14巻付録、吉川弘文館、1993年。『歴史の花かごと人と文化』吉川弘文館、1998年に再録)、藤原氏は、石田説への批判はこの村井氏の文章「に尽きるところもある」としている。石田氏が提唱した「塔上からの絵」説に対する批判は、「絵は絵空事である」、あるいは「鳥瞰的な都市図は実際に見なければ描けないものではない」(藤原氏前掲注2)論文)という観念、すなわち洛中洛外図屏風が実際の眺望であることなどあってはならない、という一種の価値観に基づくもののように思われる。揶揄や、些細な点の問題視や、あるいは「そう考える必要はない」と別の説明を試みることに終始し、「塔上からの絵」説が様々な現象を整合的に説明することに目を向けようとしないその姿勢は、あたかも地動説に対して天動説を擁護する議論で

あるかのように筆者には思える。

- 6) 藤原重雄「洛中洛外図屏風の祖型を探る—京中図を描く視点—」(京都文化博物館『京を描く—洛中洛外図の時代—』2015年)。
- 7) 小島「それは誰が見たかった京都か—構図に見る洛中洛外図屏風の系譜関係—」(京都文化博物館『京を描く—洛中洛外図の時代—』2015年)、および洛中洛外図屏風についての筆者のそれまでの見解をまとめた『洛中洛外図屏風—つくられた〈京都〉を読み解く—』(吉川弘文館、2016年)。藤原氏の批判は、直接的にはこの二つの拙稿に対するものである。
- 8) 横山華山「花洛一覧図」(文化5年(1808)頃)、歌川貞秀「京都一覧図画」(元治元年(1864))など。
- 9) 「洛中洛外図屏風成立をめぐって」(『日本学』1-2、1983年)。注4) 前掲書所収。
- 10) 高橋康夫「中世「王都」の解体—上京の地域形成—」(同『海の「京都」—日本琉球都市史研究—』京都大学学術出版会、2015年、第3章)。初出は『中世のなかの「京都」(中世都市研究12)』(新人物往来社、2006年)。
- 11) 筆者も参加している愛知県立芸術大学の学際的な科学研究で研究が進行中である。これまでの成果としては、岩永てるみ・阪野智啓・高岸輝・小島道裕編『「月次祭礼図屏風」の復元と研究—よみがえる室町京都のかがやき—』(思文閣出版、2020年)がある。(科研名称は、「月次祭礼図模本の総合復元研究」(2015～2017)、および「中世大画面祭礼図の構図法の研究—月次祭礼図屏風模本の失われた左隻の推定を中心に—」(2022～24)、研究代表者は共に岩永てるみ)。
- 12) 小島「『月次祭礼図屏風』に描かれた幕府と神社」(注11) 前掲書)。
- 13) 『大日本史料』応永19年(1412)8月29日条「常永入道記」など。
- 14) 高岸輝「室町やまと絵のなかの『月次祭礼図屏風』」(注11) 前掲書)。
- 15) 復元箇所の修復の状況を示すために、「歴博甲本」右隻第2扇の欠損・修復部分の写真を掲げる。復元版は、細部については推定も多く必ずしも正しいとは言えないが、大まかな街区の様相についてはほぼ確実であり、それを理解するために用いることは許されると思う。この復元の詳細については、『国立歴史民俗博物館研究報告』第180集(共同研究「洛中洛外図屏風歴博甲本の総合的研究」)、2014年、にまとめている。



図7 「歴博甲本」右隻第2扇中部の現状

なお、瀬田勝哉氏は、「ウラにそそぐ眼一町田本『洛中洛外図』の都市観一」（『近世風俗図譜』第3巻、小学館、1983年、同『増補』洛中洛外の群像一失われた中世京都へー』平凡社ライブラリー、2009年所収）で、「歴博甲本」が町の「ウラ」を描くことに注目し、修復部分の復元の必要性も述べている。瀬田氏がそこで紹介した藤江（岩永）てるみ氏の復元研究は、この復元版にも反映されている。

- 16) 「歴博甲本」が町の部分を大きく詳しく描くことについて、その理由を考えると、この屏風が「柳の御所」に上臈として興入れした三条家の姫のために作られたと推定されることと関係するのではないか。風俗画には、「四季農耕図」のような、実際に庶民の暮らしを見る機会がない宮中などの人間に対して、それを教えるために作る「鑑

戒画」があるが、それと同様の意味で、当時上流階級にも注目されていた町の様子を描いて見せることが発注の際に要求されたのではないか。「歴博甲本」の画中には、後家尼が若い女性たちと連れ立って京都のあちこちを見て回る様子が、祇園会、内裏、小川通（2件）に描かれ、また誓願寺門前では身なりの良い女性が物乞いに施しをしている。このような人物像は、絵を見る人間が画中に自分を投影する「アバター」として機能したのではないだろうか。物乞いや、悲田寺の病者のような存在も逃さずに描くこと、また農村風景や農事暦にもかなりスペースを取っていることも、この絵のそのような性格を示しているように思われる。

【付記】本稿で扱った、洛中洛外図屏風「歴博甲本」・「上杉本」および「月次祭礼図屏風」の画像については、下記のサイトでデータが公開されている。

「歴博甲本」：https://www.rekihaku.ac.jp/research/document/web_gallery/（国立歴史民俗博物館「WEBギャラリー」）

「上杉本」：https://www.nhk.or.jp/school/bunkazai/cont_04/cont_04.html（NHK「ものすごい図鑑 文化財編」）

「月次祭礼図屏風」：https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/A-2425?locale=ja（ColBase 国立文化財機構所蔵品統合検索システム。扇ごとの画像だが、サムネイルは左から第一扇という逆の並びになっている。）

2024年8月30日 受付

2024年12月6日 採択決定